

論文要旨等報告書

氏 名 森 恵子
授与した学位 博士
専門分野の名称 博士(保健学)
学位授与番号 甲第 4655 号
学位授与の日付 平成 24 年 9 月 30 日
学位授与の要件 保健学研究科 保健学専攻
(学位規則第 5 条第 1 項該当)
学位論文題目 食道切除術後の回復過程において補助療法を受けた患者の術後生活
再構築課程
論文審査委員 齋藤 信也、猪下 光、近藤 真紀子

学位論文内容の要旨

本研究の目的は、食道切除術後の回復過程において補助療法を受けた患者の術後生活再構築過程を明らかにし、看護実践への示唆を得ることである。対象は、食道がん治療目的で食道切除術を受け退院後 6 ヶ月以上経過し、術後補助療法が終了している外来通院中の患者 22 名である。外来受診時に半構成的面接を行い、修正版グランデッド・セオリー・アプローチの手法を用いて分析した結果、食道切除術後の回復過程において術後補助療法を受けた患者の術後生活再構築過程は「生活圏の狭小化」及び「命と引き替えに生活圏の狭小化を受け入れ自分流の暮らし方を獲得する」をコアカテゴリーとする過程として説明できた。この過程は、【予想をはるかに超えて苦痛と化した摂食・嚥下行動】が引き起こす『元には戻りそうにない実感』から始まっていた。この実感を『食べられなくなるのは当たり前』と捉える患者がいる一方で、『食道の手術を受けたことの意義を自問する』ことと『誰にでも起こることかどうか思い迷う』気持ちが交錯するが『食事にまつわる症状を他患と比べる』ことで納得する患者もいた。前者・後者ともにこの段階で『命と引き替え』と言いかせ、『今まで通り暮らしていくことの難しさ』に直面しながらも『周囲の期待を回復への糧にする』気持ちで『食べる量を増やすための試行錯誤を重ねる』試みを続けていた。しかし、この試みは術後補助療法により長期化し、これが『失職に伴う経済的困窮への懸念』及び【活動可能範囲の狭まり】をもたらしていた。しかし、患者は、『命と引き替え』と言いかせたことを想起し自分の身体状況を客観視することで『時間の経過に伴う回復の実感』及び『摂取可能量増加に伴う回復への期待』が生まれ、『これまでの生活を改め、健康に留意した生活を送る』という新たな価値観を身につけ、『慣れる努力をしつつ自分流の暮らし方を探す』ことで最終的に生活の再構築に至っていた。また、術後に生じた【転移・再発・新たな部位へのがん発症への怯え】が常に患者の心の根幹に存在していた。

論文審査の結果の要旨

本論文は、食道がんの手術後に補助化学療法・放射線療法のいずれか、あるいは、両者を受けた患者22名を対象とし、半構成的面接を行い、その内容を逐語録化したものを、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ法により、質的に分析したものである。結果として、食道切除後の患者はその回復過程において『生活圏の狭小化』をきたし、次の段階として『命と引き替えに生活圏の狭小化を受け入れ自分流の暮らし方を獲得する』ことが明らかとなった。

研究手法は堅実であり、丁寧な解析がなされていることは評価に値した。また、食道がんという非常に侵襲が大きく、嚥下障害や、栄養障害により、術後の回復にも多大の時間を要する疾患を対象にした研究はこれまで殆どみられず、この分野にあらたな視点を提供したことも、価値があるものと考えられた。一方、体重減少等の臨床症状が、患者の病の受容過程に及ぼす影響についての考察がやや不十分と思われた。また、対象者がすべて『命と引き替えに生活圏の狭小化を受け入れ自分流の暮らし方を獲得する』過程に至るのかという疑問に対する明確な回答が得られなかったことも、やや残念であった。

本論文は、食道切除術後の患者の術後生活再構築過程を明らかにし、臨床に資する新たなエビデンスを提供したことにより、博士の学位に値すると判断された。